英文学と事務能力
夏目漱石の「四角四面」を考える

阿部 公彦

本稿では「事務能力」をキーワードに、夏目漱石に話題を広げながら考えてみたいと思います。話の順番としては、まず前半で事務能力という概念やその歴史について考察し、それから後半で漱石の話にうつっていきたいと思っています。

私事になりますが、私は二〇一一年の五月まで約二年ほど日本英文学会本部の事務局で働いておりました。学会の事務局というのは支部であろうと本部であろうとたいへんなものだと思いますが、日本英文学会の場合、財団法人という形になっていることもあって、財務の処理や監督官庁との交渉など、私がこれまで体験したことのないような未知のゾーンをくぐりぬけることになり、おおいに勉強になりました。もちろんだからといって「もっともっと事務局のことを勉強したい」という気にはなりませんでしたが、この事務局体験を機にあらためて「事務能力」とは何かということを深く考えることができたのは、たいへん有意義なことだったと思っています。

私はかねがね「事務能力」という概念は、英文学研究と密接なつながりがあると信じておりました。ひとつにはそれは、他の外国語や他の領域を研究している人にくらべて、英米文学や英語学を研究している人は事務能力が高いのではないか、という私の直観ともかかわっています。みなさんはそのあたりどうお感じでしょう。以前、私はこのことについて発表をしたこともあります。私の勤務先である東京大学のイギリス文学研究室では、新任教員のイニシエーションのひとつとして、「東大英文学会」という催しでトークをすることが義務づけられております。そこで着任の際、私は「英文学と事務能力」というテーマでお話をしました。この学会はたいへんマイナーで、ぜんぜん盛り上がることのないたいへん地味なものですので、読者の中でこの話をお聞きになった人は皆無だと思います。ですので、以下、簡単にそのときの話のポイントを確認した上で、それを発展させる形で本稿の中心的な話題に進んでいきたいと思っております。

1） 事務能力の歴史

おそらくみなさん同意してくださると思うのですが、「事務能力」という言い方には非常に矮小な響きがあります。何かつまらないもの、とるにたらないもの、くだらないもの、というニュアンスがあるのです。これは「事務的」とか「事務仕事」といった一連の言い

方でも多かれ少なかれ響いてくるニュアンスで、「事務」なるものを軽視する私たちの偏見のようなものをあらわすように思います。

しかし、そこであらためて考えてみたいのは、では、いったい私たちは何と対立させる形で事務能力を軽視しているのか、ということです。事務能力が矮小なものだとするなら、それと対立する形できっと矮小ではないものがあるはずなのです。それはいったい何でしょう。

これを考えるためのヒントはおそらく事務能力の歴史にあるかと思います。日本における事務能力の歴史は、事務能力をはかるためのものさしとして古くから使われた「試験」の登場とパラレルになっています。そのあたり、天野郁夫『試験の社会史』を参考にしながら考えてみましょう。

よく知られているように日本の試験は中国の科挙にならったものです。はじまりは八世紀なので、ヨーロッパよりもその歴史は古いということになります。中国の科挙にならっていたこともあり、日本の試験は中国の古典を学ぶという形をとって制度化されました。この制度は「大学寮」と呼ばれることになります。

試験（＝大学寮）で行われたのは、具体的に言うと暗唱の試験と意味の試験です。前者の暗唱の試験を、「読む」という字を書いて「読」と、後者の意味の試験の方を「講義」の「講」という字を書いて「講」と呼びます。暗唱の試験である「読」では、「教科書の文字千字ごとに、つづいた三字をかくして答えさせる」というようなことが行われたようです。一方、意味の試験である「講」では、教科書の二千字ごとに一箇条、全部で三箇条について意味を問い、二箇条に答えられれば合格というようなことが行われました。ちなみに「落第者にはむち打ちの罰」もあったようです（天野、二八）

一応中国の科挙と同じく、この試験は官吏登用のための選抜を行ったのですが、日本では貴族制が残っていて、実際に親の地位が任官に影響しており、試験も形骸化します。それで次第にこの試験制度は廃れていってしまったようです（三一）。

そういうわけで日本ではしばらく科挙的な試験がない時代がつづくわけですが、次第にふたたび試験的な教育法が目に付くようになってきます。たとえば江戸時代の漢学の教育法がそれにあたります。とくに私塾などでは、漢学の教育には競争的な性格があったようで、その学習の方法には三段ステップ性が取り入れられていました。まず第一ステップは「素読（そどく）」。文字をどう読み、文章をどこで切るかということが問われます。これは日本独特の漢学法で、後の英学にも生かされたように思います。次に第二ステップとなるのは「講義（講釈）」。ここでは素読に使ったテキストの意味を教わることになっていました。それで最後の第三ステップに「会読（かいどく）」、「輪講（りんこう）」と呼ばれる演習が来るのですが、この演習のやり方がちょっとおもしろいものでした。これは学生同士の討論を行う場なのですが、生徒は十人か十二人ずつ二列に分かれ、向かい合

って座ったそうです。そして以下のようなことが行われました。

> A 列の学力第一位の者に B 列の四人がつづいて質問を投げる。それにうまく答えれば三点。つぎにこんどは逆に A 列第一位の者が第五位に質問してうまい回答が出れば、両者は席を入れ替わる。両列は前回の演習のときに判定された学力に従ってならんでいるわけだから、質問を出す側も答える側もわずかな賞点を争い合う。（天野、四二）

ここで注目したいのは、「競争」という性格とあいまって、何より空欄を埋めるための「問答」が教育の核となっていることです。この問答というのがどうやら事務能力の矮小さのイメージの根幹にあるのではないかと私は思っていますが、このことについては後で詳しく触れるつもりです。

さて、科挙と似た競争的な性格をもった官吏登用試験が本格的に復活するのは、さらに数百年を待たねばなりません。ご存じのように日本で試験が制度的に行われるようになるのは明治維新期です。このときに試験がはっきり官吏任用システムの一環となりました。ただ、その実体を観察してみると、ある興味深い事実が見えてきます。

帝国大学、高等学校など初期の高等教育機関の卒業生には、ある明確な特徴が見られました。圧倒的に士族が多いということです。約六割を士族がしめていたのです。この当時の全人口あたりの士族の割合は六パーセントほどでしたが、この六パーセントにしか過ぎない勢力が、高等教育機関卒業生の六〇パーセントを占めていました。これはあきらかにアンバランスです。どうしてこのようなことになったのか。しかも、さらに目に付くのは医学校や法学校などの卒業生では士族の割合がぐっと減っているということです。その占有率は三割にすぎません。つまり、行政職よりも専門職につながる教育機関では、士族の割合が小さいということです。このことから、どうやら士族は行政職を好んだらしいということが言えるかと思います。それはなぜでしょう。

この問いにははっきりした答えを提示することができます。実は近代日本の官吏任用システムの確立と、それに伴う学力主義・学歴主義の背後にあったのは、明治維新と廃藩置県ののちに発生した士族の失業という社会現象でした。藩によって身分を保障されているだけで、何らの家業も財産も持たなかった士族が、その「武」を奪われたというのが明治維新でした。その結果、士族は「武」にかわるものとして「学」をたのみにするようになったのです。いわば体育会系からガリ勉への転身といえるでしょう。そして「学」をたのみにした彼らが職業として求めたのは、それまでと同じく行政官として民を管理するということだったのです。彼らは同じ権力でも、行政的な権力を求めたというわけです。学力試験による選抜は、とくに明治初期は、失業士族の救済という役割を担っていたということです。

もちろん没落士族が家業をもたなかったということにも注目する必要はあるでしょう。家業を持たない士族にとっては「学問」が「財産」としての価値を持つことになります。これと合わせて帝国大学の卒業生を無試験で官吏に登用するという政府の政策もあり、学力信仰ができあがっていくことになります。そして、学力のよりわかりやすい量的な目安としての学歴の偏重が生まれたわけです。

ところでここでもうひとつ大事なことを確認しておきましょう。試験というものは、実は士族にとって明治維新とともにはじめて出逢うような目新しいものではなかったということです。武力を頼みにするはずの士族は、すでにとっくに空欄埋め的な事務仕事に慣れていました。

一七世紀中期以降、徳川幕府にあって武士は武力を行使する機会がめっきり減っていました。彼らの仕事の中心はむしろ治水や食料管理といった行政的なものでした。戦闘員たる武士という身分を持ちながら、その存在性はすでにそのころから曖昧化していたというわけです。だからこそ、一八世紀はじめには『葉隠（はがくれ）』のように、「死」とのつきあい方を通して理念的に武士の心得を説く書物が必要となったのだとも言えます。勤務心得などでさかんに「公」の観念が抽象的に説かれるのも、「武士」の理念と、その実際の役割とが乖離していた証拠だと言えるでしょう。このあたりは柴田純『江戸武士の日常生活――素顔・行動・精神』（講談社　二〇〇〇）をご参照ください。

こうした状況の中で注目すべきは、武士にとっての日常となりつつあった空欄埋め的な事務仕事が、なかなかおおっぴらにはそうと認められないものだったということです。実際には空欄埋め的な事務仕事をしていながら、理念としては「公に仕える」戦闘員として振る舞わねばならない。この表と裏の使い分けから生ずる気恥ずかしさと、それに伴う「俺のやっていることは所詮事務仕事にすぎない」というニセ者の意識が、現在に至るまで私たちが「事務能力」という言葉に感じる独特な重苦しさにつらなっているのではないかと私は思います。「事務能力」という言葉は、ほんとうは隠蔽しておきたいものを、直接に名指してしまう嫌らしい表現なのです。

ここで事務能力に対立させられているのは、「武」です。命をかけた戦闘というイメージが一方にあり、しかし、そのような看板があるにもかかわらず、ほんとうは命などとはおよそかかわりのないようなつまらない空欄埋めに右往左往している、そのギャップが「事務能力」という言葉を発するときに私たちの意識の背後にあるものなのです。

考えてみると「試験」という制度にも同じような、隠蔽性があります。試験には競争的・戦闘的な側面があり、場合によってはむち打ちの刑などが用いられる。それは擬似的な戦闘なのです。たとえば福沢諭吉がはじめて competition という語に「競争」という訳語をあてたときには、あまりに暴力的だからと幕府の役人に訳をかえさせられた記録があるほどです。しかし、試験も根本的には「空欄埋め」にすぎません。生死の関わらないよう

な、安全な「問答」にすぎないのです。所詮、コミュニケーションの技術にすぎない。「試験」や「公務」をめぐるこうした二重性が「事務能力」という概念の複雑さを形成しているのは間違いありません。

2）「英文学の陰謀」説

では、そろそろこの辺から英文学に話題を移しましょう。まず英語教育に焦点を当てたいと思います。ご存じのように現在、英語は高校入試、大学入試、入社試験など、あらゆる試験で大きな意味を持っています。これは明治期に試験制度が確立し、官吏登用システムとあいまって国家権力と結びつくようになったとき以来の傾向です。当時から試験科目の中でももっと重要とされたのは、あらゆる学問を学ぶための必須のメディアであった語学、とくに英語だったのです。ということは試験から派生する事務能力という概念は、英語という科目と深い関係にあったと考えることができそうです。

たしかにそうです。そのあらわれとして、学校制度としての「英語」に立ち向かうとき、我々の中には「事務能力」をめぐって起きる例の不可思議な二重性が発生するような気がします。ちょうど試験とか「空欄埋め」的な事務能力が、たとえば武力や権力といったそれ以上のものであるかのようなふりをしているがゆえに、そこに我々は独特の後ろめたさや気恥ずかしさを感じてしまう、それと同じように私たちは英語という科目に、単なるコミュニケーションの技術以上の何かを読みこむとともに、そのような錯覚を恥じてもいるのではないかと思うのです。

それが実感としてわかるのは、教員をしておられる方には思い当たることがあるかと思いますが、たとえば英文和訳の採点での体験です。私は英文和訳の答案は一種の〝魔物〟だと思っています。なぜかというと、採点者はついつい英文和訳の答案に回答者の知性そのもののあらわれを見てしまうからです。たとえば和訳がうまくいって正解していれば、私たちはそこに立派な知性の輝きを確認し、きっとこの答案を書いた人は涼しい眼差しの、爽やかな好青年に違いないと幻想したりします。ところが、こちらの仕掛け通りに間違えていると、その答案作成者はいかにも運動神経の悪そうで、おどおどして発言も不明瞭、風呂にも入っていないような人間にちがいないと勝手に夢想したりする。ましてや解読不能の訳文でも書いていれば、そこに単なる愚鈍さを越えた、崇高な狂気の芽生えさえ見てとったりします。採点者というものは何と妄想的な人種かとつくづく思います。みなさんも体験があるかもしれませんが、採点の場では、珍妙な答案があると大声でその誤答例を読み上げる方が必ずいます。そのような状況で発生しているのは、「コミュニケーション技術の人格化」とでも呼べる現象です。私たちはたかが試験の英文和訳の答案に、人格の表れをみてしまうのです。これはしばしば研究者の間で使われる「あいつは英語が読

める」という、考えてみるとよくわからない言い回しの根にあるものと同じでしょう。

なぜ、このようなことが起きるのでしょう。どうして私たちは英語という科目に、それ以上のものを見てしまうのでしょう。一方ではそれは明治以来の事務能力と権力との間にある、抑圧されたねじれの関係を連想させるものであります。ただ他方、もうひとつ検討すべき要因があるようにも思います。それは日本における「英語」という科目と、「英文学」という学問との密接な関係です。「英語」という科目、とりわけ英文和訳のような領域にかくも特殊なニュアンスがこめられてきたのは、長らく日本の英語教育を牛耳ったのが「英文学一派」だからだ、という説があるのです。

このあたりの事情については山口誠『英語講座の誕生』に詳しいので参照してみましょう。山口氏の本は、私なら『英文学の陰謀』とでもタイトルをつけたくなるもので、英文学一派が日本における英語学習の主導権を握っていった過程が、豊富な資料とともに跡づけられた興味深いものとなっています。もちろん英文学に詳しい人は、この本が明かに英文学をトピックにしていながら、出てくる英文学者がレイモンド・ウィリアムズとテリー・イーグルトンくらいであることに不満を持つかもしれません。著者もそのことを正直に告白しています。『英文学の陰謀』というタイトルをつけられなかったのもおそらくそのためだと思います。たしかにあまりにフーコー的な枠組みに寄りかかったきらいはあるし、他にもいろいろ問題はあります。ただ、誰かが言うべきことを言った本であることは確かでもあります。

山口氏の議論のポイントのひとつは、英文学一派が英語学習の主導権を握る過程で、英文学＝普遍教養という枠組が形成された、ということです。このあたりはたとえば日本では早くは富山太佳夫『ポパイの影で』中の「漱石の読まなかった本――英文学の成立」などでくわしく議論されている問題で、カルチュラール・スタディーズの人気トピックのひとつであった The Invention of English Literature 系のものとしてさまざまな形でこれまでにも話題になってきました。

山口氏の著書でも、そうした研究でよくなされる典型的な指摘がなされています。山口氏の論点は次のようなものです――英国では一八世紀から一九世紀にかけ、教養としての〝英文学〟が中産階級のための倫理的規範を提供し、その規範を通して彼らの「主体的恭順」を仕組むことで権力の安定化がはかられた。が、日本ではそのコンテクストを無視し、ある意味で無邪気に、最先端の近代国家大英帝国における「人格モデル」を示すものとして英文学が導入された、というのです。

日本でかくも無邪気に英文学＝人格モデルという見方が定着した背景にあったものとして、山口氏は二つの説明をしてくれます。一つめは、皮肉なことですが、ある時期の日本で英語がそれほど必須のものでなくなっていったということです。明治初期には「英語ができなければ学問もできない」という状態があったわけですが、ある程度翻訳なども普

及すると、庶民にとっては英語を学ぶことの必然性がそれほど感じられなくなります。だから大正期になると、英語学習のあらたな動機づけが必要となったのです。そこに入ってきたのが、「英文学＝普遍教養＝人格修養」という理念だったというわけです。もはやそれほど必要でなくなった英語をそれでも勉強させるために、人格修養という理念をもってきたという仮説です。

さらにこれとからんで、二つめの要因として山口氏が指摘するのは、次のようなことです。山口氏は、岡倉由三郎という言語学者に注目し、彼のなかで「英文学＝教養」という思想がどういう役割を担ったかについて推論します。これはやや込み入った仮説なので丁寧に見ていく必要があるかもしれません。岡倉はもともと博言学を専攻し、ロンドンにも留学した経験のある人物ですが、彼の思想は「標準語」を政治的に制度化し、地方語は「標本としてアルコール漬けするものをのぞいては撲滅すべし」というようなものでした。徹底した言語中央集権の考え方です。

しかしそこでひとつ困ったことが起きます。このような言語的中央集権の発想でいくと、日本語と英語でも似たような処理を行わねばならなくなる。「標準語」として制度化されるのにふさわしいのは英語だけであり、日本語などという言語は一地方語としてアルコール漬けされ撲滅されるべきものだということになってしまう。しかし、岡倉は日本という国民国家は日本語という制度に依存しているのであり、そのように日本語がアルコール漬けされてしまう事態は日本国民にとっては避けられるべきものであると考えました。そこで、何とか日本語の正当性をおびやかさないような形で英語を学習するための方策がないかと思案した。そして考案されたのが、英文学＝普遍教養という概念だった、というのです（七八）。たしかにこれならば、英語の持つ侵略的で覇権的な攻撃性は無力化しつつ、そのエッセンスと称して、教養的な部分だけは取り入れることができる。それゆえ「英文学」が英語学習の中心となっていったのではないか、というのが山口氏の第二の仮説です。

山口氏のこのあたりの議論は、一九八〇年代以降、英米の英文学業界を中心に盛んに行われてきた「英文学批判」の枠組みを導入したもので、そういう意味では彼自身が知らず知らず「英文学的」になっているわけですが、それはおいておくとして、少なくとも山口氏のような議論を通して、私たちは英語という科目が、単なる科目以上のものを示唆してしまった、その気恥ずかしさの歴史を解釈するためのひとつの視座を得ることはできるかと思います。そしてそれは、事務能力が事務能力以上のものを担ってしまったからこそ生まれる矮小さの意識とどこか通ずるように思えるのです。

3）漱石の四角四面

さて、今、確認したふたつの点を踏まえて、いよいよ漱石の話にうつっていきたいと思います。まず最初に参照したいのが、亀井俊介氏の『英文学者　夏目漱石』という本です。著者がこの本で問題にしているのは、英文学者としての漱石のあまりの軽視です。漱石の英文学体験はしばしば漱石が小説家になるための通過点にすぎなかったと考えられることが多いという現状を亀井氏は嘆きます。

> 文学者漱石の研究はものすごく盛んで、微に入り細にわたっている観がありますが、英文学者としての漱石の研究はそうとは見えない。作家漱石は学者漱石を蹴とばすことによって生まれた、と世間では思われてきているようで、そんな蹴とばされたものを研究するのは面白くないのかもしれません。では英文学を専攻する学者は、英文学者漱石を尊重するかというと、そうでもないようなのです。漱石は作家になることによって学問を裏切った、とでもいうような印象をもつ傾きが強いのかもしれません。（xii）

このような現状に対して亀井氏は真っ向から勝負を挑みます。漱石にとって英文学研究は単なる通過点でも回り道でもなく、彼が小説家になるにあたっての非常に重要なステップであった、また、それだけでなく、漱石の行った研究は後々の日本の英文学研究にとってきわめて大きな意味をもっていた、いや、意味をもつはずだった、というのです。

> アメリカでは合衆国の独立、建設（とくに憲法制定）に大きな貢献をした人たちを、Founding Father（開祖）と呼んでいます。そのでんでいって、私は夏目漱石を帝大英文科の事実上の Founding Father（開祖）と呼んでよい（あるいは呼ぶべきだ）という気がしています。しかしその東京帝国大学（以下、便宜的な呼称でよい時は東大と呼ぶことにします）の英文科そのものが、漱石の後任者たちによって、どうも研究や教育の方向を変えられたように見えます。そしてその後、東大においてすら、学者漱石の評価はあまり高くなかったのではないか。（xiii）

このように亀井氏の批判には冒頭からかなり苛烈なものがあります。そして議論は、この批判の根拠を示すべく展開されていくことになるわけです。

ではなぜ漱石は英文学者として偉大だったのか。その要点として亀井氏があげる大きなポイントは、①漱石がそもそも英文学という学問と立ち向かっていくときに、当時可能であったあらゆる種類の「知」による武装をこころみたということ、しかし、②漱石自身が徐々にその誤りに気づき、軌道修正をしていった、というふたつです。そこで鍵となったのが「知」から「情」へという漱石の移行でした。漱石は英文学研究を行うことで、「知」の言葉と「情」の言葉とをつなぐ方法を開発していったのだというのが亀井氏の最終的な

主張となってきます。そのあたりの試行錯誤の過程が、非常にやわらかい評伝風の記述によってなされているところがこの本の魅力です。

私がこの本を読んでとりわけおもしろく感じたのは、漱石に当初、不器用なまでの「知」へのこだわりがあったというあたりの記述です。たしかにそうなのです。当時の第一級の知識人であった漱石ですから、知性が際だっているのも当然とも思えるのですが、よく見てみると、彼の「知」は決して悠々と余裕を見せつけるような種類の、いかにも知識人というふうな知とはちょっと違っていました。どこか硬いのです。その硬さが『文学論』をはじめとする著作の硬さにもよくあらわれています。漱石の研究書を手に取ったことのある人なら、誰しもその読みにくさに圧倒されるはずです。亀井氏も触れていますが、詩の比喩を説明するのに疑似科学風のFとかfとかいった記号を用いてかえって話がややこしくなっていたりするのです。

後に漱石はこうした「知」へのこだわりから少しずつ自由になり、まさにそのおかげで小説を書く人となっていきました。「知」の呪縛に完全に支配されていたわけではなく、そこから自由になる才能をも持っていたということです。ただ、興味深いのは、そうでありながら漱石がやはりどうしても「知」から自由になりきれずにもがき、その呪縛を呪いつつ、どこか知的にふるまってしまったということでもあります。そこに私はまさに漱石と「事務能力」との格闘を見る思いがするのです。

漱石がいかに英語教育について「まじめ」であったかは川島幸希『英語教師　夏目漱石』にくわしく書かれています。漱石は松山の中学で教えていたときはわざわざ英語で出席をとったり、ちょっかいを出してきた生徒に対して早口の英語でまくしたて追い払ったりしたそうです。こうしたことはどちらかというとゴシップというかお笑いエピソードとしてとりあげられる場合が多いかもしれませんが、漱石は日本における英語教育についてもかなり組織論的な提案を行っています。漱石が英語教育について論じた文章はぜんぶで四つあるようですが（川島、七二）、たとえば漱石が帝大の三年生（帝国大学文科大学英文学科三年次）のときに書いた、当時の中学英語教育にかんする「中学改良策」という論文では、次のような至極「まじめ」な提案が行われてもいます。

たとえば、中学の外国語教員（今でいうと高校教員ということになるでしょうが）にはろくな知識もないいかがわしい人間が多く、教員免状がない者もいたりする。だから、教員資格を厳正化して、教員を理科文科大学出の学士か高等師範の卒業生に限定する、また学識があっても教えるのがうまくない者がけっこういるので学士が教員になる際には「半年間の教授法等の研究と半年間の準教師待遇の実地研修」を課す、といったことを漱石は提案しています。まるで文科省のお役人になってもおかしくないような思考パターンです（川島、七四～七七）。その他にも漱石は教員の給与の引き上げや外国人教師の積極的な登用を提案したり、教科書のレベルについてあれこれ注文をつけたりもしています。

このような事例を見るにつけても感じるのは、漱石がその講義で示した不器用なほどの「知」への偏りが、漱石が元々持っていた律儀なほどの――別の言い方をすると事務的なほどの――制度への信頼に発していたと思われるということです。しかも漱石自身、自分のそのような宿痾についてかなり自覚的でもあったと思われます。そこで参照したいのが樋口覚『雑音考』で行われる漱石とトマス・カーライルとの関係の分析です。樋口氏の考察はなかなか興味深いものなので、まずその内容をご紹介しましょう。

漱石が英文学史に登場する人物の中でもとりわけカーライルに深い関心を抱いていたことはよく知られています。それは、後で触れるようにおそらく漱石自身が人間カーライルに抱いた深い親近感とも関係しているかと思います。漱石のカーライルに対する関心がとりわけ明瞭に表現されているのは『漾虚集』におさめられた「カーライル博物館」というエッセー風の文章です。これは漱石がカーライル博物館を訪れた際の印象をつづったもので、カーライルの住居跡につくられたこの博物館に漱石が足を踏み入れ生前のカーライルの姿に思いを馳せる様子が描かれています。たとえば漱石はその建物の四角四面さに強い印象をうけ、カーライルがそこですごしたのはいったいどんな人生だったろうと考えたりします。樋口氏はこの「カーライル博物館」を精読することで、漱石がカーライルの中に読み取ろうとしたものを明るみに出すとともに、さらにそれをもとに漱石自身の抱えていた「こだわり」がどんなものであったかを示してみせたりもします。

まず樋口氏が最初に注目するのは数字です。「カーライル博物館」で漱石はしばしば「四」という数字を使っていると樋口氏は指摘します。しかし、どうも単に使っているだけではなさそうだ、背後にからくりがあるようだ、と樋口氏は考えます。たとえばカーライル博物館には漱石は「四回」行ったということになっていますが、これがそもそもあやしいというのです。

> なぜ「四回」であったかについては、漱石の数詞に対する関心、文中の他の数詞との関係によって多分に脚色された可能性を否定できないからである。漢詩人であり俳句の作者でもあった漱石は数詞のもたらす魔術的効用に大変意識的で、作品の構造そのものから数を決定したからである。この数詞の骨法を漱石はおそらく蕪村から教えられた。あとで述べるように、『カーライル博物館』は数詞、とりわけ「四」という数詞がめざましく活躍する作品である。（一九）

「四」という数字の活躍については、たしかに漱石はたとえばカーライルの家を描写するにあたって次のような表現を用いています。

> 庵りといふと物寂びた感じがある。少なくとも瀟洒とか風流とかいふ念と伴ふ。然し

カーライルの庵りはそんな脂(やに)つこい華奢なものではない。往来から直ちに戸が敲(たた)ける程の道傍に建てられた四階造の真四角な家である。

出張つた所も引き込んだ所もないのべつに真直に立つて居る。丸で大製造場の烟突の根本を切つてきて之に天井を張つて窓をつけた様に見える。（「カーライル博物館」、三五）

この「四階造の真四角な家」という部分をとらえて樋口氏は次のように言います。やや飛躍が含まれてもいますが、このあたりから話が俄然おもしろくなってきます。

このときに感じたカーライルの家の印象を「四階造の真四角な家」と漱石が表現していることに注意しよう。なぜなら、この単刀直入な表現は、この家の全体に張りめぐらす数詞「四」の露頭であり、いよいよ家の中に入って一階から四階まで上がってカーライルの遺品を観察するときの鍵となる言葉であり、実数の意味を越えてそれがカーライル本人の頭のかたちにまで投影される微妙な比喩の力をもたらす虚数であるからだ。（二九）

そして樋口氏はさらに漱石があちこちで「四」へのこだわりを示している証拠をあげながら、漱石が四という数字に「神経症的なシンボリズム」（三八）を担わせていると主張します。そして、そのシンボリズムの根本にあるのが、日本的な「四＝死」という感覚ではなく、もっと別の何かだというのです。

このあたりの事情について考えるには、カーライルと漱石に見られるある生活上の特質にも注目してみるといいかもしれません。生活人としてのカーライルについては、石塚久郎氏による「バイオグラフィア・ディスペプシア――カーライルの身体と〝胃弱〟の発見」という興味深い論文があるのでここで参照してみましょう。

石塚氏はこの論文の中でヴィクトリア朝の流行病とも言える「胃弱＝ディスペプシア」に注目し、とくに、この病をもっとも典型的な形で具現したと思えるトマス・カーライルに焦点をあてます。ディスペプシアとは言ってみれば消化不良のことであり、内臓的な症状と見なすこともできるのですが、実はそこにはいわゆる心気症＝ヒポコンデリアとも通ずるような、半ばメンタルな病ともみなせる部分があります。

カーライルはまさにそのような症状を体現していました。彼はもともと頑健な身体をもっていたにもかかわらず頭を使いすぎ、健康オタクとも呼べるような健康へのこだわりも持つようになります。その結果、極端な神経質さなども災いして、始終、消化不良や胃弱に苦しむことになります。これは病気が先なのか、神経が先なのかよくわからない、おそらく両者がからみあった症状と見なせるのでしょう。

たとえばカーライルは、強迫神経症的なこだわりをもって、食事に関する以下のようなルールを自分に課していたようです。（石塚、一三七）

◇食餌を自分の管理下におく。
◇遅いディナーはとらない。
◇外での食餌は週に１回が限度。月に１回が理想。
◇メニューとしては、ディナーは消化の良いマトン・チョップか肉汁（broth）が主、子牛の肉（veal）とビーフは要注意。野菜と果物も要注意。
◇就寝前のサパーに特製のスコッチ粥を必ず食べる。（カーライルにとって、これが一種の睡眠薬がわりとなる）

こうしてみると、このような「ルール」を決めること自体が胃弱を引き起こしているのではないかと思わせるほどの神経質ぶりです。

カーライルの神経質さは食べ物についてだけ発揮されていたわけではなく、音についても同じようなことが起きていました。彼は音ゆえに不眠症に陥ることが多かったため、ついには「手で耳をふさいで眠る方法」を編み出したと言われています。（石塚、一三六）このようなカーライルの性格はかなり有名だったようで、漱石の「カーライル博物館」にもそのあたりのことが記されています。カーライルはチェルシーに住居を定めるまでにそれはそれは苦労してあちこちの物件を探してまわったようで、奥さんの手をかりながらやっとのことで決断をするのですが、それでも騒音に対する不満は残り、新しい部屋でも屋根裏部屋を書斎に定めたりします。この屋根裏部屋は冬寒いし夏は暑いという、たいへん居心地の悪い場所だったようですが、それでも街の喧騒から遠ざかりたいという気持ちの方が強かったのです。ところが皮肉なことに、いざ屋根裏部屋に来てみると、こんどは今までは聞こえなかったような騒音がカーライルの耳にはいってくることになります。漱石はそのあたりを次のように描写しています。

> 成程洋琴（ピアノ）の音もやみ、犬の声もやみ、鶏の声、鸚鵡（おうむ）の声も案の如く聞こえなくなったが下層に居るときは考だに及ばなかった寺の鐘、汽車の笛さては何とも遠きより来る下界の声が呪の如く彼を追いかけて旧の如くに彼の神経を苦しめた。（「カーライル博物館」、四二）

漱石はこの皮肉をやや物語めかして書いていますが、この四角四面の堅牢な建物にそれでも漏れ入ってくる騒音は、カーライルにとってたいへん意味深いものであったように思います。漱石もそれがわかっていたのでしょう。『吾輩は猫である』の中では胃弱の主人

公苦沙弥先生が胃弱のカーライルに重ねて描かかれているほどですから、たとえ戯画的にであるにせよ、自分とカーライルとをだぶらせるような視線を漱石はもっていたと言えます。カーライルに対して、「あー、そういうことね」という態度をとりうる程度に、カーライルのことをまるで自分のことのように理解していたフシが漱石にもあったのです。

では、カーライルにとって騒音はどんな意味を持ったのでしょう。漱石はそこに何を読んだのか。それは「四角四面」のシンボリズムと合わせて考えるべきものだと思います。四角四面とはカーライルにとっても漱石にとっても、自らを守るための砦のイメージだったのではないでしょうか。彼らの知の方法はそのような堅牢さのイメージを土台にしていた。だから、そこに侵入してくるカーライルの雑音は、たとえば漱石が憎悪していた自らをつけまわす「探偵」と同じで、邪悪な侵入者であり、自らの築こうとする理想の世界に亀裂を走らせようとする忌まわしい敵であったと思われます。

しかし、そのような構えをとることには限界がありました。「四角四面」とは、本来、外的から身を守るための防衛手段であったはずです。ところが、その「四角四面」は実は同時に、本人の病を昂進させていたかもしれないのです。カーライルの場合でいうと、神経質に食餌をコントロールしたり騒音をシャットアウトしたりしようとすればするほど、神経も肉体も弱っていったのではないかと見える部分がある。まさにヒポコンデリーです。気に病むといいますが、メンタルな部分を発生源として全身的な病が悪化していく。漱石の場合も似ています。漱石も神経と胃腸の両方を患った人ですが、両者はたいへん密接な関係にありました。頭と肉体とを切り離すことはできないのです。たとえば漱石夫人だった夏目鏡子は、頻繁だった夫婦喧嘩のパタンをふりかえり、次のような興味深いコメントを残しています。

> こうなってくると、いつもの式で、またも別れ話です。しかし今おまえに出て行けといっても行く家もないだろうから、別居をしろ、おまえが別居するのがいやなら、おれのほうから出て行くとこうです。で、別居なんかいやです、どこへでもあなたのいらしたところへついて行きますからと、てんで取り上げませんのでそれなりになるのですが、いつもきまって小うるさくこれをいうのでした。そうしてしまいに胃を悪くして床につくと、自然そんなこんなの黒雲も家から消えてしまうのでした。いわば胃の病気がこのあたまの病気の救いのようなものでございました。（三三四～五　傍点は原文ママ）

鏡子夫人はここで「いわば胃の病気がこのあたまの病気の救いのようなものでございました」と言っています。この「救い」という見方もたいへんおもしろいのですが、ちょっと角度をかえてみれば、まさに頭の病気が胃の病気を引き起こしているようにも見えます。少なくとも両者の間に相関関係があったのは間違いないでしょう。カーライル同様、漱石

もまた神経の病と胃腸の病との連結に苦しめられていたわけです。そしてそれらの病と「四角四面」を中心にした四のシンボリズムとがつながっていると考えることができるように思うのです。

ここであらためて樋口氏の『雑音考』に戻りましょう。樋口氏は雑音を徹底的に排除しようとするカーライルに、近代人のある典型的な姿を見ます。それは雑音をシャットアウトすることでこそ自我を守り、自己同一性を保つタイプとしての近代人です。「カーライル博物館」を書いた漱石も、まさにカーライルのそのような側面に注目していたわけですから、カーライルのそのような宿痾に深い共感をおぼえていたと言えるでしょう。

しかし、近代人のタイプはそのような〝雑音シャットアウト型〟だけではありません。樋口氏は同時に、近代人のもうひとつのタイプにも言及しています。むしろ雑音を必要とするタイプです。

> 近代都市に群衆が蝟集（いしゅう）し、殺到するかぎり、また、近代社会の機構と仕組みが複雑になればなるほど、雑音の数は増えこそすれ減ることはない。世の中には、ボードレールやカフカのように自然の大沈黙や静寂に耐えられない近代人がいて、むしろ雑音を必要とする人間だっているのである。
>
> 文筆をこととする人間が近代の喧騒にまみれた世界において生き延びるためには、カーライルのようにそれなりに腐心をし、書斎の経営に工夫することが必要である。書斎とは、英語で「スタディ」だから、文字通り「研究」に励む仕事場のことである。
>
> その経過の顚末と未知の雑音との出会いによる苦悩の年鑑は、そこに住む人間の性格をある意味でよく象徴している。
>
> カーライルはその希望が失意に変貌する蹉跌を最も劇的に味わった文人であり、そうしたカーライル像を漱石がはじめて定着することに成功した。『カーライル博物館』と同時に書かれていた『猫』にも、隣の中学校から生徒が侵入し、悪さをする場面が書かれているが、その背景にはこうした漱石の感覚が働いている。（七二〜三）

樋口氏のこのような構図を助けにすると、近代という時代に対するひとつのおもしろい視座が提供されるように思えます。近代とは一方で人が沈黙をおそれ、進んで雑沓の中に紛れこんでいこうとした時代でした。そうした傾向を代表したのが、ボードレールでありカフカであったのかもしれません。進んで雑音をとりいれ、流れに身を任せ、群衆の中に溺れてみせる。しかし、他方には、その正反対の性質をもった人たちもいました。沈黙を恐れるどころか、それとは反対に徹底的に雑音を排除し、四角四面の理想的な沈黙の中で世界を構築し、理念に到達し、また自分のアイデンティティを保とうとした人たちです。カーライルや漱石はおそらく後者の代表とみなすことができるでしょう。この四角四面さ

を土台にして、漱石は明治の超エリートとして官僚的な立場から学校制度をみまわしその充実を考え、また英文学を科学の一分野であるかのような観念性とともに研究したわけです。漱石は教室でも、そうした彼なりの理念に基づいた「英文学」を、律儀に四角四面に説こうとしました。そこには、四角四面で官僚的で、ウルトラ事務能力の持ち主としての漱石像が浮かび上がってきます。

しかし、漱石はこのような四角四面の事務能力信奉者として終わったわけではありません。「カーライル博物館」にもすでに、「四角四面」なカーライルに対して自己戯画とないまぜになったような皮肉な視点をとる語り手が現れていましたが、やがて「四角四面さ」に対する距離がより明確に意識化されていきます。

そのあたりの漱石の意識の変化は、伝記的な事実としては大学の教員を辞め、小説家に転身するという経歴にあらわれています。たとえば亀井氏の『英文学者　夏目漱石』ではその推移を、「科学主義」から「文学」への変化（一四六）とか、授業において作家や作品の「講評」に重心がうつった（一五三〜四）というあたりにとらえようとしています。以前は実例を出すだけだったのが「エクスプリカシオン・ド・テキスト」（本文の詳細な分析による説明的文学批評）という方法へと移り、こまかな読みや解釈を示したり、作家や作品についてコメントを加えたりするようになるというのです。亀井氏は漱石のそのような変化を、「知」から「情」への変化という構図でとらえようとしていました。今の私たちの文脈にひきこんでいえば、漱石において「四角四面」で事務能力的な知によって構築されていた「文学」が、「情」という雑音の混入によって別種のものにかわっていったというふうに理解することもできるでしょう。

4）近代の注意散漫

雑音というのは非常におもしろい、可能性に富んだ概念だと言えます。たとえばジョナサン・クレーリーは近代における視線の変容をあつかった『知覚の宙吊り』の中で、絵画作品を材料にしながら一九世紀末から二〇世紀にかけて近代人の視線がより散逸的になったことを示して見せます。クレーリーが扱うのはあくまで視線ですが、雑音と似たものが関与しているのは明らかです。雑音にしても、逸れていく視線にしても、広い意味での注意の散漫さを連想させます。

近代という時代は対象を徹底的に深く見つめ、分析し、解釈するといういわば凝視の文化によって支えられてきました。そこでは深さと洞察力とが尊ばれ、知性もしばしば鋭い眼差しによって象徴されてきました。啓蒙主義が英語では enlightenment という語で示されることに表れているように、近代の知は光の隠喩とともに理解されてきました。その背後には、よりよく見ることが善であるという考え方があります。

しかし、クレーリーは一九世紀の終わり近くになって、そうした視線と知の方法に大きな変化が生じたと言っています。絵画面に描かれた人々の視線に大きな変化が生まれたというのです。端的に言うと、画面の中の人物がこちらを見返さなくなった、そして見る方向もばらばらになった、というのです。

ここには主体性のあり方の大きな変化が読み取れるとクレーリーは言います。それまで主体というものは凝視する主体であった。主体は世界のさまざまな情報を統御することでこそ主体という地位を得ていました。主体の力と安定感とは、その鋭い射貫くような眼差しに体現されていたわけです。しかし、一九世紀の後半ともなると、視線はもはや主体の統御を越えてしまいます。人々の視線というものは、外界からの刺戟の結果起きる、注意と注意散漫との間のせめぎ合いとしてしか生じなくなってくる。

クレーリーも触れていることですが、一九世紀の後半から二〇世紀にかけてという時代は、工場で働く労働者により多くの「注意」が求められるようになった時代でもありました。これは安全のためでもあり、また効率のためでもありましたが、そこでは事務能力を重視するような文化が一段と力を持ってきたとも言えるでしょう。機械を使って働く人に要求される最大の能力が、すでにやり方のきまっているルーティンの作業をまちがいなくなしとげる「注意深さ」なのだとしたら、要求されているのはきちんと空欄を埋めることのできる事務処理能力以外の何ものでもないということです。

このような「注意」の全盛期を迎えるにおよんで、近代的な個人がたどってきた道は曲がり角に来たともいえるでしょう。近代的個人のモデルのひとつは、集中力を極限まで高めた人物像です。ロダンの「考える人」に表れたように、意識の鋭さと深さとはその人の人間としての深みを保証していました。このような状況では、深みを見つめる悩めるメランコリックな個人こそが、知を体現することになります。おそらく今でもそのモデルは生きているでしょう。凝視の力と、意識の高さと、思想の深さとはつながってくるというわけです。そこには啓蒙主義以来の、視覚と意識の偏重が見られます。しかし、そのような近代的個人を支えてきた凝視の力は、現代になると外界からの侵入におびやかされることになります。もはや自分自身の力による視線の統御が難しくなってくるのです。

クレーリーの『知覚の宙吊り』は、一八八〇年前後のほんの十年か二十年という短い期間に近代人の視線が大きな変容をとげたという劇的な構図を描こうとしているようですが、私としては凝視と注意散漫との拮抗はもう少し長いスパンでとらえられるのではないかと思っています。近代は凝視のモデルが知のヘゲモニーをとった時代でしたが、そこではつねに注意散漫に根ざした知が併存していた。抑圧されつつも、しぶとく生き延びていた。そしてここへきて、あらためてその注意散漫的な知が注目されるようになったということではないかと思うのです。

漱石はまさに近代的な個人になることを目指した人でした。その小説に書かれるのは、

メランコリックに深々と奥を見つめるような、凝視する、典型的にカント的な近代人の姿であり、そういう人物に重ねて自分を語ろうとした漱石が、四角四面の事務能力信奉者であったというのもそれほど矛盾のないことのように思えます。何しろ漱石は明治維新以来の教育制度のまっただ中を生き、その学校制度や試験制度の中心にあった英語やさらには英文学の教育についても実に四角四面に考え続けた人だったのです。

ただ、おもしろいのは、漱石がそんな近代的個人を自分の筆で小説の中に描くにあたって、微妙に雑音の力を用いるようになったということでもあります。外からの闖入者は人間漱石がかならずしも好んだものではありませんが（たとえば典型的なのは『明暗』の小林でしょうか。実によく描かれた嫌な人物です）、実際には小説家漱石の作品はしばしばそうした他者による不意の侵入によって動かされます。むろん、小説というものは雑音を聞きつける能力なくしては書けないものです。

四角四面さの中に雑音を導き込むには、決して容易ではないような転換が必要だったかと思いますが、漱石は凝視する近代人の像の中にすでに潜在的にひそんでいた注意散漫を開拓していったのではないかと私は思っています。というわけで、今回の事務能力を中心にした話も、その究極の意義は、事務能力を話題にすることで、むしろその事務能力的な知とは対極にある注意散漫的な知に注意をひくことにあったということになるかと思います。考えてみると、事務作業に引け目を感じてきた元士族にしても、英文学会事務局のもろもろの事務作業や英語学習の矮小さに寂しさを感じつつそのむこうに「英文学」という夢を見ることで自分をなぐさめてきた私のような研究者にしても、共通しているのは、事務能力的な知と非事務能力的な知との間でバランスをとることで生き延びてきたということでしょう。そう考えると、あまりじたばたしても仕方がないなという諦めの境地にも達します。そんなわけで事務局を引退した私自身の身の振り方ですが、今後も地味ながらも事務能力研究をつづけていくことで、何とか英文学会に恩返しをしたいと思う次第です。

＊本稿は二〇一一年度日本英文学会北海道支部支部大会（十月一日　札幌学院大学）の特別講演の原稿を元にしたものである。発表の機会を与えてくださった日本英文学会北海道支部の方々に心より感謝したい。

参考文献

天野郁夫『学歴の社会史——教育と日本の近代』（新潮社　一九九二）
———　『試験の社会史——近代日本の試験・教育・社会』（東京大学出版会　一九八三）
石塚久郎「バイオグラフィア・ディスペプシア——カーライルの身体と〝胃弱〟の発見」（鈴木晃仁・石塚久郎編『食餌の技法』〈慶應義塾大学出版会、二〇〇五〉、一二七～一四六）

大村喜吉・高梨健吉・出来成訓『英語教育資料　第三巻　英語教科書の変遷』（東京法令出版　一九八〇）
勝田政治『廃藩置県——明治国家が生まれた日』（講談社　二〇〇〇）
川島幸希『英語教師　夏目漱石』（新潮社　二〇〇〇）
柴田純『江戸武士の日常生活——素顔・行動・精神』（講談社　二〇〇〇）
ジョナサン・クレーリー『知覚の宙づり——注意、スペクタクル、近代文化』岡田温司・大木美智子・石谷治寛・橋本梓訳（平凡社　二〇〇五）
富山太佳夫『ポパイの影で』（みすず書房　一九九六）
夏目鏡子述・松岡譲筆録『漱石の思いで』（文藝春秋社　一九九四）
夏目漱石「カーライル博物館」（『漱石全集』第二巻〈岩波書店　一九九五〉）
———　『文学論』（『漱石全集』第十四巻〈岩波書店　一九九五〉）
樋口覚『雑音考——思想としての転居』（人文書院　二〇〇一）
山口誠『英語講座の誕生——メディアと教養が出会う近代日本』（講談社　二〇〇一）

English Literature and Administrative Competence

Natsume Soseki's Attempt to Square the Circle

ABE Masahiko

This paper is an attempt to look into the cultural history of 'office work' in Japan, with a special focus on our ambivalence about what we call *jimunouryoku*, or administrative competence. My main aim is to examine how a turning point arrived in the career of Natstume Soseki, the Japanese novelist, who had taught as one of the faculty members in the English Department of Tokyo Imperial University before he decided to be a full-time writer. Crucially, at his turning point, he realized that his intelligence had to undergo changes if it is to allow creative functions of his mind to exercise control over his preoccupation with formalities and repetitions, a trait which, being a typical sign of Soseki's bureaucratic bent, often hampered his literary activities.